

“絆”きずな

事業所リレーエッセイ パートII 気仙沼

宮城県気仙沼に来て8か月が経過しました。祖母が訪問リハビリテーションを利用していたこともあり、人材が足りない地域での在宅医療に少しでも貢献できればと思い、気仙沼の地で働くことを決意しました。広い視点で生活を捉える必要があること、他職種が身近にいない中で連携をとることなど、臨床1年目で訪問に出ることの難しさを感じることも多々あります。しかし利用者様の「出来るようになったことが増えた」「やりたいことが出てきた」というお話を聞いたときに心からやりがいを感じます。また、人生の先輩である皆様から、様々な生活史を聞くことができ、自分のキャリアを考える上でも貴重な経験をさせて頂いています。これからも毎日の生活の中で利用者様が笑顔になれる時間が増えるよう、自分も笑顔を忘れずに力を尽くしていきたいと思えます。

一般財団法人 訪問リハビリテーション振興財団
気仙沼訪問リハビリステーション 作業療法士

佐藤 真菜

～南から始まる「訪問リハビリテーションの魅力紹介」～ 福井県

通所リハビリでの勤務と訪問看護を兼務し始めて1年経ちました。通所と訪問のリハビリで大きな違いは環境もありますが、自宅での生活動作が連続して見られることだと思います。通所でも家屋調査を行い、実際の生活動作に合わせてリハビリをします。しかし、一連の動作ごとにリハビリをしている状況と違い、訪問ではその日で動き方や環境が変わってきます。例えば、2人暮らしで介護者である方が急な怪我をして動けないときは本人が家事を自分で行わなければならない状況になります。その場合は環境を調整して一人でできるような工夫と指導が求められます。一連の動作に対して行うのではなく、連続した動作（生活）に合わせる必要があります。このように利用者の生活に直接関わり、笑顔が見られるところにリハビリ専門職として魅力を感じています。

福井県作業療法士会
公立丹南病院 通所リハビリテーションセンター なごみの里

田中 凌平

訪問リハ・地域リーダーの“絆” ご当地紹介 長崎県編

長崎県は全国でも有数の坂・階段の町（県）であり、訪問リハの需要はかなり高いものと思ってそれぞれ業務に取り組んでいます。平成9年に建築士や長崎大学工学部、医療機関など様々な領域の関係者を中心に長崎斜面研究会という団体も立ち上がっており、障害があっても、年をとっても自分の住み慣れたところで、生き生きと暮らしていけるように、活動が展開されています。訪問療法士もその会の一員として、専門性を生かした発言も行い、開発に携わっています。我々の強みである評価や予後予測などを生かして、このような他団体と上手くマッチングしていけば、今後、障害者や高齢者の斜面地での生活が大きく変化していく可能性が広がっていくのではないかと楽しみにしています。

長崎県訪問リハ・地域リーダー 理学療法士
おおさと整形外科・リハビリテーション科

永木 照彦